2011 年 1 月 26 日放送

漢方医人列伝 「山田業広･山田業精」

平馬医院 院長　　平馬　直樹

本日は幕末から明治にかけて、主に江戸・東京で活躍した山田業広とその後継ぎの山田業精を紹介します。

山田業広は幕末の考証学派の学者として評価されていますが、その本分は臨床家であり、考証学にもとづく古典医書の研究を臨床医学の基礎として深く研究した大きな功績を残しました。また、門弟がおよそ 300 名といわれ、医学教育家としてもすぐれていました。明治になり、国家の医療政策によって、漢方が衰退に向かう時勢にあって、漢方復興運動の中心になって政治運動の先頭に立った人でもありました。

このような偉大な功績を残した山田業広も、明治の漢方の衰退によってなかば忘れられた存在になってしまいましたが、昭和になって石原保秀氏、安西安周氏によって再評価され、大塚敬節氏に高く評価されることによって、その業績が現代に蘇りました。

山田業広は 1808 年、文化 5 年の生まれ、明治 14（1881）年に亡くなっています。号を椿庭といいます。東京駒込の蓮光寺に墓と、門人の建てた墓碑が残っていて、墓碑銘は業広と親しく、伊沢蘭軒門下の同門だった森立之の撰によるものです。

山田氏は平安貴族、在原業平の子孫といい、江戸になって医者の家系となり、高崎藩に仕え、業広の父・由之も高崎藩の侍医でした。業広は幼少から学問に優れ、儒学を山本北

山門下の朝川善庵について修め、医学は父・由之から学びました。17 歳の時に父の病気により家督を継ぐことになり、19 歳で江戸に出て伊沢蘭軒の門に入り、渋江抽斎・森立之らとともに蘭軒門下の秀才として名を高めました。蘭軒の没後は多紀元堅に学び、1837 年本郷春木町にて開業しました。1857 年幕府の命を受けて 1865 年まで江戸医学館の講師を務めました。明治維新の明治元（1868）年に、高崎に転居し、高崎侯の命令により、医療行政の責任者となり、高崎藩医学校の医学大教授に任じられましたが、1871 年の廃藩置県によって高崎藩が消滅して、その職を解かれました。

1874 年に再び上京、78 年に門人と協力して神田五軒町に済衆病院を設立して、院長となりました。80 年、漢方復興のための政治結社温知社を結成し、初代社主となり、復興運動の先頭に立ちましたが、志半ばで病に倒れ、1881 年波乱の人生を終えました。享年 74。

業広は臨床の傍ら、考証学に基づき古典医書の文献研究をこつこつと続け、厖大な著作を遺しました。明治維新という時勢の事情とおそらく本人の意志もあって、これらの著作のほとんどは出版されることなく、やがて散逸してしまいました。幸いなことに全国の図書館に多くの自筆稿本や写本が保存されており、なかには中国に渡ったもので所在が確認されたものがあります。

森立之による碑文では 38 部 163 巻とある著作は、全国図書館の目録調査などで、83 種以上が残されていることが確認されます。『黄帝内経』や『傷寒論』などの医系の研究書が主ですが、とりわけ『金匱要略』に対しては精力を注いで研究したことが碑文からもわかります。

その研究の成果である『金匱要略札記』と『金匱要略集注』は長い間所在がわからず、幻の書として大塚敬節氏は『金匱要略札記』の捜索を呼びかけ出現を心待ちにしていました。1980 年代になり真柳誠氏がこの 2 書の自筆稿本が北京の中国中医研究院の図書館に収蔵されているのを発見しました。さらに真柳氏と小曽戸洋氏のねばり強い努力によって、この 2 書と『傷寒論札記』が合わせて影印出版されて、ようやく日の目をみたのです。業広の著作の研究は今後、日本の漢方研究者が是非取り組まなければならない、大きな課題です。

業広の臨床の記録は、後継ぎ山田業精の書『井見集附録』と明治の医学雑誌『温知医談』などで知ることができます。業広は若い頃から臨床の面では原南陽に私淑して、南陽の『叢桂亭医事小言』を読みこんで研究していました。精力的な古典研究の成果を活かして、帳仲景の処方の運用に心血を注ぎました。著作で唯一出版された『椿庭経方弁』は、帳仲景方に対する研究の成果が込められた臨床応用のコツが記され、味わい深い内容です。その診療記録は観察が鋭く、子の業精や門弟のための教育的コメントも含蓄に富み、現在の私たちにも大きな示唆を与えてくれます。

次に晩年の業広が取り組んだ漢方復興運動について述べます。明治 6 年、新政府の文部省医務局は医療制度を作り、資格試験を定めました。これによって西洋医学を修めなければ、新しく医術開業試験に合格することは困難となり、漢方医は世代が交代すれば自然消

滅する危機に立たされたのです。全国の漢方医がこれに強く反発して反対運動を興しましたが、東京で中心になってその運動を担ったのが業広を初代社主とする温知社でした。余生を傾けてこの政治運動に取り組んだ業広でしたが、病を得て翌年世を去り、志を遂げることはできませんでした。温知社社主は浅田宗伯に受け継がれましたが、漢方復興の目的を果たすことは結局かないませんでした。

業広の次男業精は 1850 年生まれ、業広 43 歳の子で、長男が夭逝したため、業広の医術を継承しました。業精も将来を嘱望された人材で、父の晩年の研究と臨床を支えました。業精は儒学を芳野金陵の門に学び、医学は父業広に学びました。20 歳の明治 2 年、高崎侯の命により、新設された東京大学医学部の前身である大学東校に入学、2 年間西洋医学を学びましたが、廃藩置県により中退しています。高崎の父、業広のもとに戻り、父を支え続けます。

幼少から儒学の素養を身につけ、漢方の基礎をしっかり学びながら、最も早い時期に当時の最高レベルの西洋医学の大学教育を受けた特異な存在といえましょう。著作のひとつ『井見集附録』は父業広の臨床の記録を収録していますが、業精自身の診療録も見られ、臨床家としての確かな力量が見て取れます。

父の歿後、業精も温知社の漢方存続運動を続けますが、西洋医学も修めた経験から、古典を理解するのに、西洋医学の説も参考にすべきである、外科の治療は西洋医学がすぐれているなどの漢方と西洋医学のどちらも重視する考えを表明して、保守的な漢方復興運動の批判にさらされたようです。明治の医学雑誌『和漢医林新誌』に堂々たる論文を発表していますが、浅井国幹がこれを援護したのみで、かえって反発が大きかったようです。

こういう事情からか、やがて温知社の理事も辞任しています。その後も『継興医報』などの医学雑誌に論文を発表していますが、晩年の動向は詳しくわかっておらず、1907 年 58 歳で亡くなったことが、寺の過去帳で確認されています。業精には三男一女がありましたが、男子は皆夭逝し、医者は業精の代で途絶えました。そのために業広と業精の蔵書と著作が散逸してしまったのです。

前述したように、山田業広の著作は、一部は所在不明になっていますが、国内外の図書館に多数が保存されています。その組織的研究が今後待ち望まれます。また、業広・業精 2 代の臨床から学ぶものも大きく、私も『漢方と診療』誌（株式会社臨床情報センター発行）の「江戸の医案を読む」という対談記事で、秋葉哲生先生とともに、ふたりの診療録を紹介しましたが、今後さらに研究が深まることが期待されます。

本日は山田業広・業精親子の業績を紹介いたしました。